

「下町」という意味システムの持つ両義性

五十嵐 泰正

一 「下町」再考

いまさら語るまでもなく、下町というのはきわめて曖昧な言葉である。とりあえず手近にある大辞林⁽¹⁾を引くと、こうある。

都市の市街地のうち、低地にある地区。主に商工業者などが多く住んでいる町。東京では東京湾側に近い下谷・浅草・神田・日本橋・深川などの地域をいう。

さらに、この下町を形容詞化した下町風なる言葉を引いてみると、こうなる。

下町の風俗・風習・気風。特に、東京の下町に残る、江戸時代の「いなせ」「いき」などの風をいう。

こうした記述からは、下町という言葉自体は本来低地地区

や商工業者地区を意味するものの、それが、東京のある特定の地区を指す固有名詞にもなっていることがうかがえる。つまり、一般的な用語法としては「大阪の下町」「ソウルの下町」のように使われても、下町とだけ書くと、「東京の下町」を指すことが暗黙のうちに了解されているのである。以下この論文では、この「東京の下町」を指す固有名詞としての下町を、カッコ付きで「下町」と表記することにする。

では、「下町」とはどういう地域なのだろうか。試しに、昨今出版されて人気を博している「下町」ガイドブック⁽²⁾を見てみよう。行政区で言えば、隅田川西岸の台東区・中央区を中心に、対岸の墨田区・江東区の大部分、文京区・荒川区・北区・葛飾区・豊島区などの一部を含みこむ地域が「下町」と呼ばれているようであるが、王子・亀戸・森下・神保町などの「周縁部」を「下町」に含めるかどうかは、ガイドブックの間でさえ見解が分かれている。また、谷中・根津・本郷・小石川など、明治期までのお屋敷町であった「第一山の手」⁽³⁾が、「下町」ガイドブックに含められている。その一方で、地理的

に言えば下町の中心部とみなされている台東区のほかでも、金杉地区、石浜地区など、観光資源に乏しい住宅地区は、全くといっていいほど「下町」ガイドブックには取り上げられていない。

どうやら、これらのガイドブックに取り上げられている「下町」は、確固とした面的な広がりをもつ領域として定義されたものでも、住んでいる人の社会階層で定義されたものでもなさそうである。ガイドブックの中からは、「下町風」の景観や食などの文化商品で観光客を惹きつけることのできる（面的な広がりを持たない）スポットの集合が「下町」であるという、トートロジーしか見えてこない。さらに付け加えれば、そうした「下町」の商店街には、「下町気質」を備えた人たちが店を構えているというように、これまたトートロジカルに想定され、それも集客の重要な魅力と考えられている。

「下町」ガイドブックに典型的に見られるように、観光産業においては、ある特定のスポットとその景観、文化商品、人々の気質が本質的・有機的に結び付けられ、それらがトータルで「下町」と呼ばれる。「下町」と呼ばれる場所に行けば、その地で確かに育まれてきた文化や人々の気風を味わうことができる⁴と繰り返す観光産業の背景には、歴史に育まれた「本物」を求めるノスタルジアの高まりがある。こうした観光のまなざしを通して、「下町」は、領域的・社会階層的に定義さ

れた内実を剥ぎ取られて、商品として記号化されたオーセンティシティの修辭となつてゆく。

さらに言えば、「下町」という言葉につきまとうオーセンティシティは、首尾一貫したものではない。「下町」ガイドブックには、「人情」「粹」「情緒」といったそれ自体定義の難しい感覚的な名詞や、「懐かしい」「ホッとする」といった形容詞が頻発する。そうした一連の語彙の中から、歴史性、庶民性、コミュニティ性などいくつかの要素を抜き出すことはできるが、それらの要素自体が互いに矛盾しあう性格を孕んでいるので、そうした要素の周囲に結ばれるいくつかの「下町」像もまた、一貫した内実を持ちえない。

領域や社会階層による実質的な定義もできない上に、イメージのレベルでも首尾一貫した像を結ぶことがなく、誰も明確な定義を試みようともしない。しかし、現代日本の消費社会において、確実に何らかの強力なオーセンティシティをアピールし、それがゆえに集客力を持つ何ものか。本稿では、そうした、相互に連関する一連の語彙の曖昧な束としてしか定義できない意味システムとして、「下町」を捉えてゆく。筆者には、どこが「下町」であるのか、「下町」とは具体的に何であるのかを追及するつもりはない。本稿を書き進めてゆく上でさしあたり必要なのは、東京のいくつかのスポットが「下町」と呼ばれており、その「下町」という言葉が、実質的にも、イ

メージのレベルでさえも内実がないにもかかわらず、ある種の強力なオーセンシティブティを発生させているという事実だけである。

また、ここでもうひとつ確認しておきたいのは、こうした観光化のまなざしの中で再構成された「下町」という意味システムは、決して観光産業や観光客の側から特定の地区に一方的に押し付けられたものではないという点だ。むしろ、そうした地区の行政や商店会や住民も、往々にして、積極的に「下町」という名指しに呼応して地域振興を図り、自らの中に潜んでいるさまざまなローカル・アイデンティティを、「下町」の名のもとに再活性化させてゆく。仮に、行政や商店会、個々の商店主や住民といった、さまざまなアクターのイメージする「下町」という像がバラバラであったとしても。

そうしたやややアイロニカルな前提を踏まえた上で、このオーセンシティブティの修辭としての「下町」が、ナシヨナリズムやそれに裏書された人種的排除意識とどのように関わってゆくのか、ということが、筆者の問題意識である。次節以降では、その課題を、いくつかの「下町」エッセイの分析を通して論じてゆくことになる。

二 池波正太郎の「下町」

― ナシヨナリズムティックに閉じてゆく公定の「下町」

オーセンシティブティの修辭としての「下町」を、もっとも端的な形で描き出した作家の一人が、池波正太郎である。池波は、さまざまな江戸庶民の型を体現したような人物が登場する大衆時代小説で、長年人気を博した作家である。代表作『鬼平犯科帳』に見られるように、その作風は、江戸の庶民の暮らしと気風に細やかな目を向けたものである。

そうした人情噺や捕り物小説を大量にもものす一方で、浅草聖天町で生まれ、上野と浅草の間にある浅草永住町で育った池波は、一般に「下町」と呼ばれる地域と、そこに住む人々の日常や事物にまつわるエッセイを、大量に書き残している。その中には、食通を自認する彼らしく、「下町」地域の名店の現在と過去を批評し、幼かりしころの思い出の味を回想するものが多く、「下町」の（食を中心とした）文化と景観、人々の気風や生き様が、有機的に結び付けられている。「下町」の味覚や気風に対する池波の拘泥は、決して貴族的なものではなく、むしろ大衆性を念頭に置いたものではあるが、ある種の執拗なほどの「本物」⁽⁵⁾のオーセンシティブティ志向には違いない。そして実際に、「下町」を商品化する観光産業の中でも、池波の名がしばしば言及される。

池波のエッセイは全体的に、失われてしまった佳きものへ

のノスタルジアと、急速な変化により生まれたものへの嫌悪に貫かれている。たとえば、「当然貧乏暮らし」だった小学生時代の自らの食卓を回想している、『一年の風景』（朝日新聞社、一九八二年）に取められた「昔の味」（一四六―五〇頁）というエッセイ。現代と違って、「子供ののためにと、特別に料理されたものは一皿も」なく、食卓に載るのは、飯、冷奴、焼茄子、そして海苔といった何の変哲もない食べ物ばかり。しかし池波は、「現代における同じ食品とは、まったく質が違って」おり、「子供」ころにも、「みちたりた……」おもいがした」と描く。こうしたエッセイで池波は、「下町」をかつて社会経済的に強く裏書きしていたはずの貧困という負の要素を指摘しつつも、幼少期のほうが、経済的・量的な富裕さに還元されない質的な「本物」によって心が満たされていた、という強いノスタルジアを披瀝している。

さらに重要なことに、池波は往々にして、オーセンティックな「下町」の生活の中に、意識的に日本というネイションを透かし見ている。たとえば、「新しい年の習俗」と題されたエッセイ⁽⁶⁾においては、家族総出の大掃除、「暮れ襦袢」と新年の新しくしたてた餅、寛永寺の鐘の音といった、「下町」の何気ない年越しの風景を、わざわざ「日本人としての習俗」と呼びなおす。そして、現代では松飾りをしなくなったことを嘆くくだりでは、同時に日の丸を掲揚しなくなったことも嘆

いてみせる。

池波正太郎の時代小説やエッセイは、いかにそれがネイションを意識したものであったとしても、決して国家の全体像に直接言及することがない。そうではなく、首都東京の「下町」に住む庶民の生活を語り、特定の場所（*place*）性に安定的に着地しながら、そこにネイションを透かし見るという手法をとっている。日本という国家の中心部から切り取られた「下町」という特定の場所。そこにおける、場所の文脈に強く根付いたきわめて日常的な生活の営みこそが、「日本人」の営みであるように、池波は語ってゆく。

これはたとえば、一連の維新ものの中で、曲がりなりにも日本という国家の全体像を想像することができるホワイトカラー男性に対し、ネイション・ビルディングという経験をセルフ・ビルディングの物語と重ね合わせて語りかけた、司馬遼太郎文学における国家の描き方とは、好対照をなす⁽⁷⁾。池波正太郎の作品群は、時期的にも重なる司馬と並び称されるべき、もうひとつの戦後大衆小説のチャンピオンであるといっている。その池波文学の果たした重要な機能の一つを、司馬の読者層よりさらに一段「大衆的」で、よりローカルな文脈で日々の生活を営んでいる人々に、司馬とは別の形で、日本というネイションを再確認させ続けたことと論じることができよう。「下町」という場所に張り付いて、歴史に育まれた「下

町」の美風にのっとった日常生活を営むことがすなわち、「よき日本人」としての営みであると、池波正太郎は説くのだ。

池波正太郎がノスタルジックに描き出す、失われゆくオーセンティシティの総体としての「下町」は、観光産業や、観光化のまなざしに積極的に応じようとする地域の行政とは非常に相性がいい。

池波の出身地である台東区は、「下町」の中心的な地域とみなされ、たとえば青島都政下に「芸術や伝統を育む」上野・浅草副都心と定義づけられるなど、東京都の中で「歴史と伝統」を割り当てられ、観光と文化資源を生かしたまちづくりが明確に期待されている。それに対して、区行政自身も、「国際観光都市・台東を目指して―多彩な魅力の下町テーマパーク」と副題に銘打たれた『台東区観光ビジョン』（台東区、二〇〇一年）をまとめあげ、自らに割り当てられた役割をすすんで全うしようとしているように見える。

その台東区は、二〇〇一年の生涯学習センター開館の際、図書館部分の一階に、池波正太郎記念文庫をオープンさせた。そこには、自筆原稿や絵画といった池波にまつわる資料が多数収集されているのはもとより、池波の書齋が復元されているなど、単なる中央区民図書館の一コーナーという位置付けを越え、区外からの来訪者・観光客のまなざしも意識し、多分

にエンターテイメント色の強い空間となっている。このような、区外の目も意識した区民中央図書館の常設企画の目玉に、数ある台東区ゆかりの文人たちの中から、池波正太郎が選ばれたということは、重要なことである。池波正太郎自身と、彼の描くオーセンティックで、日本というネイションを内包した「下町」像が、区民のローカル・アイデンティティや誇りと、一般来訪客が「下町」に期待するものと同時に満たすものとして、台東区行政に公的に認証され、採択されたということを意味するからである。

さらに、この池波記念文庫の入り口のパネルに、池波の写真とともに、一九七九年の『男のリズム』（角川書店）というエッセイ集から、以下のような一節が印象的に選ばれていることを、見逃すことはできない。

東京人に故郷はない、と、東京人自身が口にするけれども、私はそうではない。私の故郷は誰がなんといっても浅草と上野なのである。

ここに登場する、上野・浅草を東京圏では数少ない「ふるさと」と呼ぶディスコースは、オーセンティシティの修辭としての「下町」という、不定形な意味システムのひとつの核に位置するものといっていよう。不定形な「下町」とい

う意味システムのいくつかの要素——歴史性、庶民性、強固なコミュニティ——が辛うじて矛盾なく交わる点に、「懐かしいふるさと」という形象がある。成田龍一は、一九六〇年代の観光産業がディスカバー・ジャパンを標榜する現象の中で、「都市は自分の故郷ではない、自分の故郷は都市以外の地域にある」という意識が登場したと論じているが、「下町」は、そうした故郷になりえないはずの大都市東京の中で例外的に「ふるさと」を感じることでできる場所として、観光化されているのである。

「下町」が「ふるさと」としてまなざされる契機があるのだとすれば、「ふるさと」について、歴史社会学で繰り返されてきた指摘を忘れてはならない。すなわち、近代日本は、学校教育や文部省唱歌を通じて共通の「ふるさとの記憶」を作り出し、「ふるさと」を「日本」へと拡張してゆくことで、国民動員の基礎としてきたのだ、という指摘である。そのため、成田によれば、日本における公定的な故郷の物語は、閉ざされた日本人としての故郷であって、日本に住む外国人にとっては承服しがたい故郷観でしかない⁽⁹⁾。

ここにおいて再び、「下町」という修辭がナシヨナリスティックな相貌を見せはじめ。観光を意識した地域行政に、選ばれ、押し出された公定の「下町」ディスコースが、「ふるさと」というナシヨナリスティックな性格を強く持つイメージ

である以上、それを純化した形で提示しようとするればするほど、この地域はますます「本物の日本」「生粋の日本」として語られてゆくことになる。あくまでも日本人のものである「東京の中のふるさと」下町」に、「懐かしさ」「生粋の庶民文化」が残っていることをアピールすることがそのまま、「本物の日本」がこの地域に存在していることを強調することへと、スライドしてしまう。

現実には、そのささやかな一例を挙げることもできる。二〇〇二年のFIFAワールドカップを控えた時期に、台東区は、国際線の機内誌や空港のロビー、海外向けの政府刊行物に「*Taiho in Tokyo, The real Japan*」というキャッチコピーを冠した広告を出し、世界中からの観戦客に「一年を通じて心温まり伝統的な浅草や上野」をアピールすることを試みたのだ⁽¹¹⁾。

しかし現実の台東区は、「本物の日本」という表象とは裏腹に、数多くの外国人就労者や居住者を抱える区でもある。古くから東京圏でも有数の在日韓国・朝鮮人コミュニティである東上野や上野二丁目には、数多くのエスニックショップが集積しており、新来の韓国人も多数流入している。また、アマヤ横丁には、中国語圏・東南／南アジア系食料雑貨品店が建ち並び、週末には関東一円に在住している外国人の買い物客が集まる。

在日韓国・朝鮮人が、来日して／＼させられてから既に数世代経ていることを考えると、彼らにとっても上野は明らかに「ふるさと」であるはずである。しかし、「下町」を「本物の日本」と呼びたがる観光のまなざしや、それに応じる公定の「下町」という言葉の前で、上野や浅草は在日韓国・朝鮮人にとっても「ふるさと」たりうるだろうか。「下町」という意味システムに、実際にそこに住む外国人住民の居場所はあるのだろうか。

三「共生の作法」

ーソトに開いてゆく契機としての「下町」

ひとつの手がかりとして、八〇年代中盤以降の都市論／東京論の一角を担った枝川公一のエッセイにおける「東京の外国人」に対するまなざしの変化を、少し追いかけてみたい。海外経験の多い枝川は、香港、マドリード、サンフランシスコ、そしてニューヨークなどにおいて都市の姿を追い求めながら、必ず東京に立ち戻り、世界の諸都市を写し鏡とした数多くの東京論をものした。墨田区向島に生まれ、八〇年代以降は江東区越中島に暮らす彼にとって、いわゆる「下町」ものも得意ジャンルであり、『ふりむけば下町があった』（新潮社、一九八八）、『東京下町とっておきの人々』（中央公論新社、二〇〇〇）というエッセイ集を上梓している。

たとえば、一九九三年の『続・東京暮らし覚え書き』（はる

書房）を見てみよう。枝川は、多くの東京論者が退場した時期に、残された「東京に生きている」人間として、「旧東京」とは異質の「新東京」が現れつつあるという認識から、その「新東京」の実態はわからないまでも、それが現れるプロセスを見つめようとして、このエッセイ群を紡いだという（二四九〜五〇頁）。このエッセイ集の中で枝川は、馴染み深い「旧東京」に対して、池波のような素朴なノスタルジアと愛惜の情を表明することはない。翻って、「新東京」という得体の知れない何ものかの勃興に対して、戸惑いながらも現実としてしかかと見据えようとしているのだが、こと東京の多人種化という「新東京」の一つのエッジに関しては、きわめて否定的に、たじろぎ、いらだつ姿勢を隠さない。

その名も「外国人滞留者」と題されたエッセイ（九七〜一〇八頁）では、「さわらぬ神にたたりなし」という調子の日本人住民の「知らん顔」を批判した上で、このままだと将来は、アメリカ諸都市やパリ、ロンドンといった大都市と同じように、人種民族の雑居したスラムに東京も足を引っ張られるようになる、と論じる。さらに、「メガシティの病弊」という危機感を顕わにしたエッセイ（一六九〜八〇頁）も、外国人に関する記述を頂点としてまとめられている。「耳に心地よくない外国語」と感じてしまう差別意識を告白し、ロシア人やコロンビア人の娼婦に象徴されるような第三世界の貧窮を内部

に取り込みはじめた東京も、根の部分でむしばまれ始めている、と論じる。これが、保守系の総合誌『正論』に連載されたエッセイをまとめたものであるという経緯は差し引くにしても、⁽¹²⁾急増する外国人住民に対するきわめて否定的な叙述である。

『続・覚え書き』当時の枝川は、ニューヨークを頻繁に訪れており、しばらくしてから『ニューヨーク世紀末』（光文社、一九九六年）という論集を上梓している。ここでは、マギングとヘイトクライム、ドラッグとレイプにまみれた、ニューヨークの錯綜するエスニシティ間の泥沼のコンフリクトが悲観的に描かれている。九〇年代前半のこの時期、ニューヨークという「二世紀のフロンティアを主張できる、おそらく唯一の都市」（三七六頁）を通して見た、東京の周回遅れの多人種化は、枝川にとって悪夢にも見えたのだろう。

ところが、『続・覚え書き』から五年後の一九九八年、多様な国籍・職業の東京在住外国人たちを精力的に取材した『街は国境を越える』（都市出版、一九九八年）では、枝川は外国人住民に対して全く違う姿勢を見せている。「自分のなかの東京」が「もっと軽くなれと念じつつ」書かれた本書は、彼にとつて「幸せな仕事」だったという（三二四―三五頁）。この本のもともなになったのは、『東京人』というオーセンシティ志向で静

的な江戸・東京論の牙城のような雑誌での連載であるにもかかわらず、枝川は、きわめてポジティブな筆致で、東京在住の外国人と、彼らを取り巻く日本人の日常を描く。この、世間では不況の深化とともに外国人労働者に対する風当たりが厳しくなった五年間における、唐突にも見える枝川の姿勢の変化は、何を意味しているのだろうか。

その答えの鍵となるものの一つが、このエッセイ集の二番目に収録された、パキスタン人シェフを巡る物語「深川飯とカレーの信頼関係」（三三―四八頁）にあるような気がしてならない。

周囲の中小製造業や建設業に「外国人労働者」が増えてきた九一年、深川在住の歯科技工士鳥山さんは、見るからに寂しそうな彼らを放っておけないと、仲間たちとお国自慢の料理を持ち寄ったランチ・パーティを企画し、彼自身も深川飯を持ってゆく。そこで深川飯がハラルかどうかを確かめながら平らげたパキスタン人のターリック氏と懇意になり、やがてインド・中央アジア料理店を共同経営するまでになる。

最初のランチ・パーティの席上、鳥山さんは、「深川世界市民憲章」なるものを宣言するが、そこにはこのように謳われている。

下町気質の本領は、困っている人を見過ごせないことに

あります。その開かれた心を世界に向けてみたいと考えます（枝川前掲書、四〇頁）

前節では、ネイションに閉じていくかに見えた「下町」という修辭が、ここではまったく反対に、「世界に開いていこうとする意思に正当性を与えているのだ。ごく普通の「下町っ子」である鳥山さんが、自らの中に根を下ろしている（と少なくとも信じている）。「下町」意味システムの語彙を使って、内在的に多人種共生の志向性を表現した、ということがきわめて重要なポイントだ。ニューヨークの泥沼の人種摩擦を目の当たりにしてきた枝川は、素材で地に足のついた多人種共生への心意気を、他ならぬ足元の深川で教えられたわけだ。

しかし、鳥山さんの「宣言」は、決して突飛なものではない。それを説明するためには、オーセンティシティの修辭としての「下町」はともかく、実際の東京東部低地地域は、東北・信越・北関東を中心とした地域から流入する人口を絶えず抱えてきた場所でもあったことを思い出すことからはじめなければならぬ。

「向こう三軒両隣」という言葉や、町内会組織に支えられた盛んな祭礼などから、ややもすると、「下町」には同質性の高い強固なコミュニティが存続しており、その住民はあたか

も特定の土地に代々根付いてきた「アーバン・ヴィレジャーズ」ばかりであるかのようなイメージに陥りやすいが、それは現実の誇張された一側面でしかない。本稿で詳述する用意はないが、台東区をはじめとする東京東部地区は、絶え間ない人口流動の歴史を、江戸時代以来重層的に積み重ねてきた地域、その意味で真に都市的な地域でもある。

「下町」が、強い人と人との結びつきに彩られた「ふるさと」であるというイメージで来訪者を惹きつけてきたとするならば、それは本来、地方出身者たちによって二次的に仮構された結びつきであり、「ふるさと」である¹³。それは、祭礼や熱心な地域活動から、「下町」の古い商店街や住宅地のコミュニティがいかに強固に見えようと、一皮剥けば「どこのナニモンかわからない」さまざまな世代の出郷者たちの集まりであることを意味する。

そうした意味で、表面に見える強固なコミュニティ性の一つ奥にある現実の「下町」での生活とは、異質性と匿名性の上に成り立つ都市的な生活そのものでもあり、現実そこに生きる「下町っ子」たちは、ある種の都市的な作法を身につけることを、そのアイデンティティ——「下町気質」——の一端として自認してきた。たとえば、江戸東京博物館館長を務めた小木新造は、次のように描写する。

大正九年（一九二〇）第一回国勢調査の結果によれば、東京市の人口二二七万人余のうち、六割近い人々が東京に本籍のない人たちである。

こうした東京の生い立ちには、住民意識にも影響を与えずにはおかなかった。かくして東京人の気安さと、親切心に富んだ東京人気が、特に下町を中心に広がっていた。東京人気質は近隣の人間関係を緊密に保ちながら、時に親切心の押し売りと思われるほどの親密さを発揮する。それでいながら意外なほどサッパリした他人への不干渉主義が徹底している。

（小木新造監修『幻景の東京下町——森義利の「少々昔の図絵」より』日本放送出版協会、一九八九年、一九五頁）

これは、アジア系外国人と地元日本人の調査を池袋や新宿で行った奥田道大を受けて、西澤晃彦が「人のプライバシーには立ち入らない、そっとしておく、その人が本当に困ったときには手助けをする、手助けできないまでもそのような心の用意をする」と表現した地域生活上のルールとしての「共生の作法」と奇妙なほど一致する⁽¹⁴⁾。奥田らの調査によれば、地方からの単身者の流入に慣れていた池袋や新宿では、その歴史の中でこうした「共生の作法」が涵養されていたおかげで、アジア系外国人が流入してきたときにも、特段の反発などが

惹起されなかった。池袋の（日本人）住人たちは、人口流動の歴史によって築かれた異質な他者との共存のルールを、国内の出郷者たちより遥かに異質性の高いアジア系外国人にも適応し、そしていざという時には、自然に手を差し延べたのである。

枝川が深川で出会った鳥山さんもまた、そうだったのだろう。周囲の外国人たちが「見るからに寂しそう」なのを見兼ねたら、「大げさなことではなくて」自然に声をかける。だからこそ、鳥山さんはこの行動を、まさに彼の考える「下町気質」に内在している美德として胸を張った。それを見て枝川は、深川に内在していた「共生の作法」を再発見し、それが外国人住民にも適用されることを確認して、多人種共生都市・東京のそう悲観的でない未来を垣間見ることができたのではないだろうか。

「下町」と呼ばれる地区の周辺にも、八〇年代後半以降のグローバルイゼーションの加速で、外国人住民が急増した。この国際移動は、それ以前の国内移動で起こっていたことの延長線上にある、と考えることができる。東京が日本というネーションの「中心」から、世界都市として世界システムの「中心」へと発展してゆくのに従って、そこに集まる「周縁」の人々の範囲も飛躍的に広がり、結果として東京の異質性はま

すます増大してゆく⁽¹⁵⁾。ただ、問題は、東京で異質な他者を迎える住人の側が、国内からの移動民と、国境を越えた移動民の間に質的な差異を設定して、壁を閉ざしてしまいかどうか、である。

第三節では、池袋で見出された外国人住民との「共生の作法」は、「下町」という意味システムの一部としてもビルトインされていることを、窺い知ることができた。

しかしその一方で、「下町」という意味システムは、第二節で見たように、外国人住民の居場所のない、きわめてナシヨナリスティックな「ふるさと」という像も結ぶ。

「下町」という意味システムは、その本質的な不定形、曖昧さのゆえに、外国人に対して閉じてゆく方向性と開いてゆく方向性の、どちらをも正当化する資源となりうるのである。ただ、観光産業とそれに応じたい地域行政にとって、ナシヨナルに閉じてゆくオーセンティックな「下町」こそが強く打ち出されるべきものである以上、資本と政治の空間で公的・支配的な語りとなるのは、池波正太郎に象徴されるオーセンティシティの修辞としての「下町」のほうである、ということには、いくら強調してもし過ぎることはない。

その間隙を縫って、人口流動の歴史の中で鍛え上げられた「共生の作法」を、多人種共生という新たな局面にも拡張することができるとの。 「下町」というアイデンティティが、「ふ

るさと」というイメージに繋留されているのだとすれば、そしてその「ふるさと」が、決して先祖代々そこに住み着いたという意味ではなく、二次的に獲得した共同性を意味しているのであれば、その「ふるさと」の像に外国人住民をも含むうるかどうか、いま問われている。本稿で垣間見えたこの現代的課題を丹念に検討する、筆者のフィールドワークと社会学的分析は、まだ緒についたばかりである。

註

- (1) 『大辞林 第二版』三省堂、一九九五年。
- (2) 本稿では、代表的な「下町」ガイドブックである『るるぶ 東京下町を歩こう』(JTB、二〇〇一年)と『まっぶるマガジン 東京下町を歩こう』(昭文社、二〇〇一年)を参照した。
- (3) 三浦展「郊外の比較文化史と『第四山の手』の現在」若林幹夫ほか編『郊外』と現代社会』青弓社、二〇〇〇年、六三頁。
- (4) ここで深く踏み込むことはできないが、経済的な斜陽意識の中で、ノスタルジア志向が高まり、「遺産」が「生産」されてゆくイギリスの観光産業を論じたアリーの議論は、現代日本の観光産業に対しても十分に示唆的である。(ジョン・アリー『觀光のまなざし』加太宏邦訳、法政大学出版局、一九九五年、一八六～二三九頁)。
- (5) たとえば、昭文社前掲ガイドブックの「文豪が愛した美食を求

めて」のコーナーに、池波正太郎は、森鷗外・夏目漱石とともに最も大きな扱いで登場する（二〇一頁）。

(6) 池波正太郎『池波正太郎の春夏秋冬』文藝春秋、六八―七〇頁。

(7) 司馬遼太郎の作品群が、いかに戦後日本のナショナルリズム再構築に果たしたか、彼の死後の一時期、盛んに論じられた。たとえば小森陽一は、男性の英雄たちのセルフ・ビルディングをネイション・ビルディングに重ねて語るという、大正末期の「大衆小説」から受け継がれた手法を用いる司馬の一連の維新ものが、敗戦後の日本を創った「企業戦士」たちにリアリティを内在させる形で物語を提供し、近代日本という国家をめぐる幻想を創出した、と論じている。（小森陽一「文学としての歴史／歴史としての文学」小森陽一、高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、一九九八年、八頁）

(8) 東京都都市計画局『副都心整備計画 一九九七―二〇〇五

拠点性の増進／都市空間の質の向上をめざして』、一九九七年。

(9) 成田龍一「都市空間と「故郷」」成田龍一、藤井淑禎ほか『故郷の喪失と再生』青弓社、二〇〇〇年、二五―六頁。

(10) 成田前掲論文、三三―四頁。

(11) 朝日新聞、二〇〇二年二月一日朝刊。

(12) 同じ一九九三年に枝川は、『続・覚え書き』と似たようなモチーフに貫かれた『東京はいつまで東京でいつづけるか』（講談社、一九九三年。初出は講談社のNEXT誌、一九九一―九二年）という論集も発表している。そこにも、新大久保の混沌とした多入種状況を記述した章があり、急速な変化に困惑しつつも外国

人と「人間同士」の関係を持ちはじめた多様な日本人住民の声を掬いあげた上で、「東京に生きてきた自分」が「生き方そのものが極端に違う人間が入り乱れる未来を受け入れる「精神の耐性」を持つているか」と自問している（一三三―一三四頁）。こちらも考えあわせると、東京の多入種化という現象に対して、この時期の枝川は評価が定まっていなかったと言え、この『続・覚え書き』のトーンは、『正論』に合わせたという側面が相当強いのかも知れない。

(13) たとえば、明治期の浅草を出郷者たちの幻想としての（家郷）と論じた吉見俊哉「都市のドラマトゥルギー」弘文堂、一九八七年、二四七―九頁を参照。

(14) 西澤晃彦「東京の銭湯」『現代思想』二八一―二、二〇〇〇年、九〇頁。

(15) たとえばわれわれは、その端的な例として上野を想起することができる。上野駅という大ターミナルを抱え、長らく「北の玄関口」であったこの地は、京成スカイライナーの乗り入れにより「空の玄関口」ともなった。そして、東北や上信越からの上京者とまったく同じように、この駅に現れた第三世界からの「上京者」は、上野で東京生活の第一歩を踏み出し、イラン人などその一部は、上野公園を一時的な滞留場所として選んだのである。

（この論文は、平成十四年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部です。）